

もう24年になるのだ。高校ラグビーの巨星、あの秋田工業が、覇権を遠ざかってから。

花園出場は今年で64回目。通算勝利は実に「127」を数える。1934年の第16回大会での初優勝を皮切りに、優勝は15回。いずれも堂々の最多記録だ。OBにもW杯に3度出場を果たした榎庭吉彦氏（新日鐵釜石）をはじめ、現7人制日本代表チームディレクターの太田治氏、現明大監督の吉田義人氏ら、そうそうたる顔ぶれが並ぶ。

地鳴りのするようなスクラム。迷いなぎ縦突進。どこまでも粘り強いタックル。伝統の紺と白の段柄ジャージをまとった北の勇者たちは、1925年の創部以来、長きに渡り全国の頂点に君臨してきた。

しかし87年度の優勝を最後に、秋田工業は冬の時代を迎える。

平成に入って花園の決勝に進出したのは、第75回大会（平成7年度）の一回だけ。2000年以降はベスト8入りすら果たせていない。近年は秋田中央ライバル校の台頭もあって、県大会で敗退することも珍しくなくなってきた。

なぜ、秋田工業は勝てなくなったのか。その理由を、黒澤光弘監督はこう説明する。

「昔は秋田工業のラグビーといえば県内の花形スポーツだったから、陸上の百斤1位だとか、柔道の重量級王者、バスケットのトップ選手といった、化け物が来ていたんです。強いからそういう子が集まったし、だから強かった。いまは勝てなくて魅力がないから、そうした素材が来なくなってしまった」

黒澤監督は秋田工業、筑波大でし



高校物語2012晩秋
秋田工業高校
[秋田県]

Q、NO8として活躍した後、母校に赴任して87年度の優勝監督となった。しかしその後は上位に進出するものの覇権に手が届かず、02年度にいったん監督を退いている。

「準優勝した平成7年(95年)くらいまでは優勝を狙えるチームが結構あったけど、そこで勝てなくて、ベスト8の壁を乗り越えられなくなりました。87年に全国優勝した後、結果を残していればという思いはあります。監督だった自分の責任ですね」

90年代は高校ラグビーが大きな転換点を迎えた時期だった。スクラムを1・5メートルまでしか押せなくなり、より大きくボールを動かすスタイルが次第に主流となる。FWのパワープレーを軸にしたオールドドックスなラグビーを得意とする秋田工業にとっては、辛い変化だった。

2007年の地元国体へ向け、02年から6年間、県全体の強化を担当した黒澤監督は、08年にふたたび秋田工業の監督に就任する。当時は2年連続で花園出場を逃しており、再建を託されての「異例の復帰」(本人談)だった。

部を離れた6年間でさらにルールが攻撃側有利に変わったことを受け、黒澤監督は大胆なスタイル変更へと舵を切ることを決意する。

「アップテンポで思い切りボールを動かすラグビーに変えるしかない」と。そこから新たなスタートを切ったんです」

復帰1年目の08年度は県予選で敗れたものの、翠卒は決勝で秋田中央を15-10で破り、4年ぶりの花園出場を果たす。続く10年は春の選抜大会で後に全国制覇を遂げる桐蔭学園と7-14の接戦を演じ、シード校と

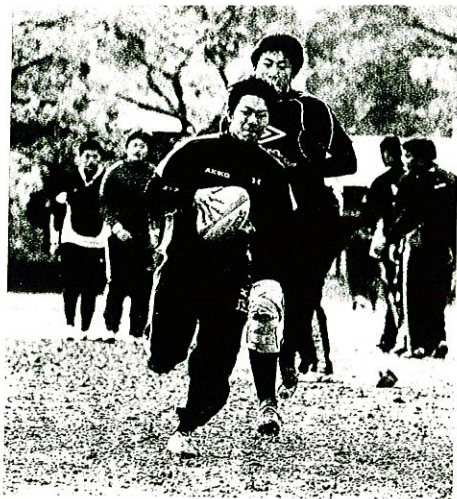
秋田工業といえばなんといってもスクラム。今季もセットプレーの安定が躍進の原動力となっている

復活の胎動。

春のセンバツ大会で伏見工、桐蔭学園といった強敵を連破し、初めてベスト4に進出。全国の舞台で久々に大きな存在感を示した。今季のチームは高校日本代表候補5人を擁し関係者も「近年で間違いなくナンバー1」と口を揃える豊富な戦力を有する。10月27日の県予選では、昨年苦杯を喫した秋田中央に45-0で圧勝。史上最多の花園優勝回数を誇る古豪が、名門復活へ向け着実にステップを刻んでいる。

文/直江光信 写真/犬童嘉弘





数年来取り組んできたアップテンポのラグビーがすっかり定着。「過去を振り返っても一番というくらい動ける」と黒澤監督も走力には自信を持つ

して出場した花園でも、優勝候補の一角、東海大仰星をあと一歩まで追い詰めた。現明大のS O村井佑太郎やL O寺田大樹（ともに12年U 20日本代表）を擁し、徹底した展開勝負で聖地を沸かせたこの年の戦いぶり、改革を進めるクラブに確かな手応えをもたらした。

そして当時の1年が3年になった今季のチームは、「総合力では2年前を上回る」との評価を受けている。F B成田秀平主将、F L宮川智海、W T B伊藤悠成の高校代表候補トリオを筆頭に下級生時から公式戦を経験してきたメンバーが多く、2年生にも元高校ジャパンの父を持つL O三浦昌悟やゲームメイク力が光るS O伊藤龍之介など、能力の高いタレントが揃う。要となるポジションに逸材が並んでおり、戦力バランスは全国でも屈指の存在だ。

それを証明するように、春の選抜大会は日川、長崎北、伏見工業を下し、激戦の予選リーグを見事突破。決勝トーナメントでは関東新人大会優勝の桐蔭学園に快勝し、準決勝で激突した王者・東福岡とも前半0-

0と互角の勝負を展開した（最終スコアは8-17）。

積雪で冬場の練習がままならない北国のチームにとって、4月上旬に開催される選抜大会は鬼門だ。2月一杯まで満足のグラウンドを使えないため、関東以西のチームとはどうしても仕上がりに大きな差が出る。一方で近年は選抜大会の重要性が飛躍的に高まり、ここでどれだけ厳しい試合を経験できるかが、その後のシーズンの成績に直結するという流れが定着した。選抜大会が創設された2000年以降、花園で東北勢が準決勝に進出したのは'00、'01年の仙台育英だけという事実が、苦難を如実に表している。

そして、だからこそ今季の秋田工業にとつて、春の時点で全国ベスト4入りしたことは単なる結果以上に大きな意味があった。強みであるセツトプレーと展開力ほどの相手にも確実に通用していた。ここで得た自信とトップレベルのラグビーを身をもって体感した経験は、かけがえない財産になったはずだ。

成田主将はいう。「伏見に勝つて、桐蔭学園に勝つて、3連覇している東福岡に負けはしたけど手応えを感じられた。2年前のチームも強かったんですけど、今年はさらにFWが動けるので、一体となったプレーができる。自分たちの力を100%出せば、優勝も不可能ではないと思っています」

6月の東北大会を快勝すると、夏はブロック国体を見据え菅平へは行かず、地元で黙々とトレーニングを積んだ。その甲斐あって国体の出場権を獲得、ほぼ秋田工業そのままの布陣で臨んだ本大会では1回戦で大

阪に15-25で敗れたものの、常翔学園や東海大仰星など強豪校から選抜された豪華メンバーとも互角に渡り合い、さらに自信を深めた。

「点数だけ見ればよくやれたかなという感じだけど、中身はまだまだ。ただ、なんだかんたいって大崩れはしない。全国の強豪とも際どい勝負をできているので、やっぱり力はあ

**いい環境がある。
ラグビーを応援する土壌もある。
ここで結果を残せば、
またいい循環が生まれる。
このチャンス逃してはならない、
という思いがあります。**

るのかな」と黒澤監督

10月の県予選では「いろんなアクシデントを想定し、ナーバスになった」という指導陣の不安をよそに悠々と勝ち上がり、決勝も秋田中央に45-0と完勝して花園出場を決めた。本号締切り時点でまだ出場校は出揃っていないが、今季の実績からシード校に選出されるのは確実。場合によってはAシードに推されるこ



円陣で選手に声をかける黒澤光弘監督。'87年度の最後の花園国体優勝時の監督であり、'02年から6年間、県職員として地元国体へ向けた秋田県全体の強化に携わった後、'08年より監督に復帰

とも考えられる。

もちろん名門復活を宣言するのはまだ時期尚早だ。選抜大会4強やシード校選出くらいは榮譽では、「アキコー」の大看板には釣り合わない。ただ長く続いた不振からは釣り合わない。ふたたび本気で花園の頂点を狙えるステージに帰ってきたのは確かだ。少なくともその雰囲気は、クラブ全体に戻りつつある。

指導陣は黒澤監督含め学校の教員事務職員だけで5人。週末になればさらに黄金時代のOBが何人も訪れ、熱心にアドバイスを送る。夜間照明



今季の部員数は3年生が23、2年生20、1年生18人。FB成田秀平が主将を務める

つきのグラウンドは、来年には全面人工芝に張り替えられる予定だ。こうした部分からも、復権への気運の高まりは感じられる。

「いい環境がある。県全体にラグビーを応援する土壌もある。ここで結果を残せば、また昔みたいに他競技の逸材が来ることも期待できる。このチャンスを逃してはならない、という思いがあります」（黒澤監督）強さが人を呼び、集まった人がさらなる強さを生む。勝利から始まる好循環。真の復活は、新たな時代の幕開けでもあるのだ。